環境汚染と生活環境

Pollution and our Living Environment

有 賀 喜 一 *

わが国における環境問題は、昭和30年を契機として経済の高度成長とともに発生した。昭和33年に水質保全法及び工場排水規制法が、昭和37年にはばい煙の排出の規制等に関する法律が制定されたが、期待された効果が得られないまま、国民の生活水準の向上と相俟って、環境の悪化、公害の深刻化を一層誘起した。昭和42年には公害対策基本法が、昭和43年には大気汚染防止法、昭和45年には水質汚濁防止法等の関係法令が制定され、それ以後、環境汚染は少しずつ回復の兆をみせてきた。

最近では、国民の生活環境に対する考え方も多様化した中で、快適な環境を求める声も多くなり、生活環境をめぐる公害や自然環境の問題——例えば、生活雑排水、一般廃棄物、近隣騒音等について、高い関心が払われるようになってきた。

国民の環境問題に対する現状認識、被害感、対応、要望等についての調査が実施され、公害に関する世論調査¹⁾として発表されている。昭和59年度の調査によると、わが国の公害や自然環境に対する評価は、10年前と比べて「良くなった」と37.4%の人が評価している。一方、「悪くなった」と評価した人は4人に1人の割合で25.3%であった。また、10年後のわが国の生活環境については、「良くなる」23.5%、「悪くなる」28.6%と悪くなると予測する人がやや多い結果となっている。

昨年8月、「湖沼環境の保全と管理——人と湖の共存の道をさぐる」と題するテーマで'84世界湖沼環境会議が滋賀県琵琶湖畔で開催されたのを機会に、「湖をみんなで美しくする環境展」に参加した人を対象に、公害に関するアンケート調査²⁾を日本環境技術協会で実施した。その調査によると、わが国の公害や自然環境に対する評価は、先に実施した世論調査と差のある結果となったので、その概要について述べる。

アンケート調査では、(1)居住地域周辺の自然環境、(2)生活環境における問題、(3)環境を守るための行動、

(4)わが国の公害や自然環境に対する評価等について設問した。

それによると、(1)居住地域における自然環境の状況を、附近に流れる川の汚れ具合と魚の生息状況で調べた結果では、農山漁村地域では他に比べて川や湖沼は清浄で魚が生息している所が多いこと、また回答を得た約80%の所で環境が悪くても魚が生息することがわかった。(2)居住地域の公害や自然環境を守る上で問題となる事項は、①「水質の汚濁」34.4%、②「ごみ処理」13.5%、③「大気の汚染」12.8%、④「すぐれた自然の景観の減少」11.8%、⑤「騒音」9.6%の順となった。

また、これを居住地域別にみると、住宅地域では①③④②、商店や事務所の多い地域では①③⑤②、農山漁村地域では①②④③の順となって、地域によって問題点の異なることもわかった。(3)家庭で発生する生活雑排水について日頃から環境汚染につながらないよう気をつけているかとの問いに対しては、「一応気をつけている」60.5%、「非常に気をつけている」18.9%、「あまり気をつけていない」14.9%、「まったく気をつけていない」1.6%で、約80%の人が生活雑排水に対して何らかの気くばりをしていることがわかった。(4)わが国の生活環境(公害や自然環境)の評価では、10年前、現在、10年後の状況について設問した所、10年前の生活環境については「良かった」37.8%、「悪かった」41.5%となり、悪かったと回答した人が多かった。また、現在の状況については「悪い」と回答した人が断然多く73%を占めた。更に10年後の状況については28.8%の人が「良くなる」、42.4%の人が「悪くなる」と回答した。先の世論調査では、現在の生活環境よりも10年後は、「良くなる」23.5%、「悪くなる」28.6%であったものが、今回のアンケート調査では「良くなる」28.8%、「悪くなる」42.4%となって、データの上では、10年後の生活環境は現在よりも「悪くなる」と回答した人が多かった。

今回のアンケート調査で得られた地域住民の公害や自然環境についての考え方は、概ね次のようである。

(i)一部の地域においては、今後地域開発が進み、自然環境が破壊されるという被害感や危惧の念がある。

* ㈱堀場製作所 技術本部副本部長
Kiichi ARIGA

図-1 わが国の生活環境の状況10年前, 現在, 10年後

(ii) 大多数の家庭では家族が公害に対する認識を持ち、それぞれの立場で気くばりしながら、生活環境を快適なものにしようと行動している。

(iii) 10年後には、現在の生活環境よりもより快適な生活環境が実現すると4人に1人は予測し、一方、3割から4割の人は依然として生活環境は悪いと予測している。

今回のアンケート調査が、今後の環境行政の施策の上で何らかのお役に立つならば幸甚である。

参考文献

- 1) 内閣総理大臣官房公報室：公害に関する世論調査，昭和59年10月
- 2) 日本環境技術協会：環技協ニュース，5，(4)，4 (1984)

新製品ニュース

安定、高精度注入の

次亜塩素酸ソーダポンプ

ミルフロー制御容量ポンプ———日機装

次亜塩素酸ソーダは不安定な液体で、放置したままの状態でも液中よりガスが分離し、ポンプ停止中や間欠運転になると接液部内にガスが充満し、再起動時の吐出不良という不都合が生じやすく、特に吐出量の少ない低ストローク長、低回転数のときに顕著であった。日機装が今回開発した次亜塩素酸ソーダポンプは、吸込口を上方に、吐出口を下方に設け、かつガス抜きを真上に設けて、ガスがポンプ内部へ浸入することなく上方へ排出し、接液部本体へのガスの浸入を効果的に防止できるようになった。また、ポンプ停止中接液部内にガスが発生した場合に、バルブ比重が取扱液比重より小さいものを使用しているため、ガスが上昇し吸込バルブ近くに集まり、吸込バルブがガスで被われるとバルブが落下し、ガスと液との置換が行われ、早期排出が可能となった。

更に、従来のダイヤフラムは発生ガスが透過しやすく、ガスが油圧室に溜まり、吐出不良を起こすことがあったが、数百分の一という透過率の特殊ダイヤフラム使用により、吐出不良もほぼ完璧に近く防止できるようになった。

問い合わせ先＝日機装株式会社

東京 (03) 442-8311